

家着型そでなし資料の分析

国立民族学博物館収蔵標本による(7)

山崎光子

Analysis of *Sodenashi* for Home Wear: Specimens
in the National Museum of Ethnology (7)

Mitsuko Yamazaki

はじめに

いわゆる仕事着に関する調査研究は、家政学の立場からは民俗服飾として、民族学、民具学の立場からは物質文化、有形民俗文化財などとして関心を持たれていたが、日本常民文化研究所(神奈川大学に移管)による全国の各都道府県を対象とした大企画な仕事着調査の結果もまもなく公開される予定であり、国立民族学博物館における労働衣服に関する共同研究の成果も年内にまとめて刊行されようとしており、ようやく仕事着研究の意義が衆目の認めるところとなりつつある。

低迷している仕事着研究の方法論の一つの試みとして、また公にされる機会のほとんどない貴重な収蔵品の分析結果を、国立民族学博物館の共同研究員として分担してきた資料についてこれまで報告してきたが、刺子衣やかぶりものに続き、本報では、のこるそでなし類についてとりあげてみたい。

日本在来のキモノ型仕事着の中でそでなしは、人体の直接に被覆し、寒暑や、皮膚への外傷から身を守り、更に働きやすいように身を整える衣服に比べ、やや異なる機能を持つ。それらの衣服の更に外側を重ね着として覆うからである。

そでなしの用途は一般的には綿入れの防寒用衣類として知られているが、はんでんなど他の防寒着と違って袖がないため、秋から冬にかけてや、初春など季節の変り目にも用いられるほか、袖元が邪魔にならず着脱も容易なために労働用にも便利な衣類として愛用されてきている。

本報告では以上のような防寒用の家着型そでなしを対象としたが、そでなし状衣類はそのほかにも荷物を背負って運搬する時の肩あてとして着用されることもあり、また特殊なものとして、そりひき専用のそでなしや、ぜんまいとりの袋の役目をするそでなしなどもあ

るため、順を追って報告したい。

研究方法

研究方法は前述の国立民族学博物館研究報告(6巻2号319~322頁)で定めた方法に準じた。その項目は下記の通りである。

1. 資料の情報
呼称、採集地、採集年代、採集者等
2. 資料の分析
 - a. 形状の状態
 - b. 織り布の素材と色、織、染柄
縫い糸の素材と色、刺子模様
 - c. 縫い方、縫い代、裁ち方

結果と考察

資料1-1 [品名] ドンチン
[標本番号] H 27207 (衣類F-2-5)

資料1-2 [品名] 袖無し
[標本番号] H 34303 (衣類G-3-13)

この2資料は収集時期や方法は異なるが、ほぼ同型の、つい最近までどこでも着られていた形の防寒用家着型のそでなしである。

資料1-1のドンチン(現地名も同じ)は新潟県佐渡郡相川町大字岩谷口から、1960年、九学会の調査時に古河静江氏により資料2-2のカタアテ[H 27219]など、他の40点あまりとともに収集され、その後、文部省資料館から国立民族学博物館に移管されたものである。

資料1-2の袖なしは、使用者、岐阜県吉城郡上宝村鼠餅部落の下手美徳氏から寄贈された作業服一式の中の1点で、民族学博物館の松山利夫氏によって1978年9月10日に収集されているが、その頃すでにつくられなくなっていると付記されている。袖無し[H 34292]

がもう1点あるが、素材が毛糸で手編み作品のため今回ははぶいた。ほかに仕事着、もんぺ、前掛け、帯など25点があるが、いずれも洋服の古くなったものや、洋服型更生品など比較的新しい時期のもので、伝統的農作業衣の崩壊期の衣類の様相がしのばれる。

形状は、いずれも通し衿の襦つき(佐渡では襦をヒコと云う)で、黒い掛け衿のある綿入れのそでなしである。前後身頃とも並幅の布一幅でつくってあり、身幅の狭い分を前身頃に通し衿、脇に広い襦をつけて補っている。前幅と襦の長さが、資料1-1の方がやや大きく、綿の厚さも厚いが、採集地のちがいにみかわらず、形状、大きさは2資料ともほぼ等しい。今日のように既製品(農作業着も)の時代でなくても型が同一であることは、子女の花嫁修業にかかわる和裁教育が村落の中に徹底していたためだろうか。また全国的に出まわっていた和裁指導書などが、それらを画的に普及させたものであろうか。いずれにしても、並幅一幅を背に、半幅に襦を加えた前身頃をもつ綿入れのそでなしは、わが国の衣類の一つの型として定着していたようである。

いずれも日常着として着られていた防寒用そでなしであるが、労働用としても用いられていたことが、しみやよごれ方などから推察できる。

素材は表布は平織の木綿である。一見して色緋を思わせる柄であるが、プリント地で特に資料1-2は細かい緋を模倣した染柄である。目がつんでおり、糸密度の込んだ量産製品で、資料1-1は経(27/cm)、緯(28/cm)、資料1-2は経緯とも(24/cm)ほどである。

色については、資料1-1は灰味赤茶〔5R4/4(grayish red brown)〕地に白色の小緋と細かい格子風の模様で、資料1-2は灰黒〔N2(grayish black)〕の亀甲地文の中に、やどぎついろの赤〔5R4/14(rad)〕などが緋風に染められている。染料は勿論、合成染料である。新しい布を用いて縫製したと思われる。

裏布は緑地に赤、黄の細縞のある美しい絹布で、暖かそうであるが、それは着古した長着の更生布を用いているため、薄くなってすり切れている。特に胴部のいたみがひどい。資料1-2のそでなしの裏側には合成染料の色あせた紺布が用いられている。衿の素材は資料1-1は目のつんだ衿布用布であり、1-2には別珍布が用いられていた。

厚みは資料1-1は4.23mm、1-2は2.54mmと異なるが、重さは資料1-1は320g、1-2は300gとほ

ぼ同じである。前者が手に持っても軽く感じられるのは、綿質の差によるものかもしれない。

縫い糸と縫い目は、袷仕立ての綿入れのため、殆ど見ることはできないが、掛け衿の裏の針目などから右捻りの黒木綿糸を用いていることがわかる。襦の上部には、いずれも0.8~1cmほどのへりとり布がつけてある。資料1-1は裏の絹布を用いているため切れてしまっているが、資料1-2は丈夫な布でしっかりとつけてある。

縫い方は、綿入れ仕立てのため確かめられない。裁ち方は、資料1-2は総裏つきのため用尺はやや少ない。衿のはぎ方が変則的であるが、他の衣類と組合せて裁ったものであろうか。1-2は表布が裾から裏側に折り返され、襦も含めて裏側の相当量を補っているが、衿が中央ではいであるので無駄がない。しかし襦との裁ち合せ方をよく考えて組み合わせたら、衿を切らずにすんだのではないかと思われる。

表布総用布は、資料1-1は約320cm、1-2は約400cmであった。

資料1-3 (品名) チャンチャンコ

(標本番号) H 8087

資料1-4 (品名) チャンチャンコ

(標本番号) H 8085 (衣類E-3-7)

このチャンチャンコ2点は、すでに報告した³⁾山形県鶴岡の農作業衣〔H 8086〕と共に個人の収集になったもので、類似の手法が用いられている。資料1-1・2は綿入れのそでなしであったが、これらは刺子衣である。布使いも異なり、身幅が多くとってあって、肩あてもあり、布の表面がすり切れるほど使われている作業用のそでなしである。両者とも大きさ、刺し方、縫い方などが共通しているため一緒にとりあげた。

二者とも、かけ衿型、襦つきそでなしである。前後身頃には一般的な上半衣と同様に左右一幅ずつ布を使ってあり、その代り襦が狭い。襦の裾部分の中央にへりとりした馬のりがついている。へりとりは、衿を除いて周辺部全体、衿下、裾、袖つけ部、襦に表0.5裏1.0cmで施してある。

この2資料は同一人の手で縫われたものと思われるが、布使いに若干の差がある。資料1-3は身幅を大きくとったため肩幅も広くなり裏側へ4cmほど折り返し縫いとめて着ている。資料1-4は、その轍を踏まないためか、身幅は広いままであるが、袖明き部分は資料1-3で狭くしたと同じ幅にくりこんで裁ってある。即ち襦の一部が一枚の布の中で続いてとられ

ている。以上のような点からみて資料1-3・4の順で縫われたものかと思われる。

肩あて布は表側に衿と共布でつけてあり、装飾効果をあげているのは次報の資料2-1も同様であり、すでに機能性とデザインが一体となってパターン化している様子がうかがえる。資料1-3はよく着こんであり、刺子でできた凸面の表布の藍色がすれて落ちてしまっている。特に胸部がひどい。

資料1-3は後身頃の両脇の同位置に赤い紐をつけた跡が残っている。どのように用いたものであろうか。資料1-4は、裏の両肩と後胸部分に当て布をあて刺子がしてある。

素材は、いずれも平織りの厚手の傷みのない木綿布を用いている。はぎは、表布にはほとんどないが、よくみると部分によって色が若干異なっており、長着などを裁った残り布と組み合わせて用いたものと思われる。

糸密度は布端まで刺子が施してあるためはっきりしないが、へりとり布が同じ布とすれば、資料1-3は、経〔12/cm〕、緯〔18/cm〕、資料1-4は、経〔18/cm〕、緯〔20/cm〕で、太糸でびっしりと織られている。色は肩当て以外は藍染で、資料1-3は暗い緑味青〔7.5 B 3/4 (durk greenish blue)〕、資料1-4は色も濃く、青味黒〔10 B 2/2 (bluish black)〕で肩当ての縞布も、新しい布を用いたようにみえる。特に資料1-3は厚手で丈夫そうであるが糸密度は、前者は、経〔22/cm〕、緯〔20/cm〕で、後者は経緯とも〔22/cm〕で薄手である。色は資料1-3が、青味黒地に黄味灰〔7.5 Y 8/2 (yellowish gray)〕の縞、資料1-4は灰黒地〔N 2 (grayish black)〕に灰色〔N 6 (gray)〕の縞であった。資料1-3の緋状にみえる図の斜線部分は、黄味灰の緑糸に地色の紺糸を絡ませて1本の糸として織ったものという。

布重ねの枚数はいずれも2枚重ねで、厚さは資料1-3は身頃2.7 mm、裾2.3 mm、衿6.5 mm、へりとり4.5 mm、資料1-4は身頃2.4 mm、裾2.8 mm、衿3.8 mm、へりとり3.8 mm、重さは710 gと525 gである。前者が重いのは折りまげた肩幅なども影響しているものかと思われる。

刺し子糸はいずれも左撚りの太い木綿糸2本どり(但し、資料1-4の裾の細かい刺しは1本どり)、刺し糸の目はおよそ縦〔14~26針目/10cm〕横〔40~50本/10cm〕ほどの細かい間隔で図のような見事な模様が生じていた。資料1-3の肩当ての下にも刺しがある。縫い糸はやはり左撚りの太紺糸2本どりであるが、伏せ縫いには右撚りや、時には左撚りの細かい紺や黒

の糸を使っている。へり通りの始末にも太い左撚りの糸があり、縫製時期の古さが推察できる。

縫い方は、背・裾つけとも合わせ伏せ縫いで、合わせ縫いは〔6~8針目/10cm〕の中針、伏せ縫いは〔3~4針目/10cm〕の大針、へり通りの伏せ縫いは〔10針目/10cm〕の小針で、裾の縫い代はいずれも身頃側に折り、厚い断ち切りの裾の布端を〔10針目/10cm〕でかがってあった。表の肩当て布は〔4~5針目/10cm〕で粗くくけたり耳ぐけがしてあった。資料1-3は衿の中央のはぎ目が割ってなく、左衿側に折られていて、特にぶ厚くなっていた。

裁ち方にはいろいろと工夫がこらされている。身幅がいずれも布幅よりかなり狭いので、余り分でへりとり布やその他の衣類の紐などをとったものかと思われる。資料1-4の方は肩幅を狭くし、余った少ない布をくり出した裾の先につけて身幅を資料3と同じに確保している。用布がその分だけ少なくなっている。

衿、肩当て布の用布はほぼ同量であるが裁ち方が異なる。資料1-3の左右の衿の縞が合わなかったためか資料1-4は衿中心を切らずに済むように裁ち合わされている。しかしなぜかやはり衿中央にはぎが入っている。

表布の総用布は資料1-3が300 cmあまり、1-4が280 cm位であった。

資料5 (品名) 刺子チョッキ

〔標本番号〕 H 32037 (衣類G-2-14)

これは資料の3-1と共に京都の商店から購入されて国立民族学博物館に入ったものである。素材、用途は異なり、丁寧に縫われた上等の袖なしであるが、仕立て方に共通性があり、また資料1-3・4とも衿や肩布のあつかいが同じであり、類似のそでなしが山形の致道博物館にもみられることから、やはり山形県で採集されたものであろう。

裂き織りらしくみえるが、布を裂いて緯糸にしたのではなく刺し糸に使うような太い糸を経緯糸に用い、更に白糸も交え緻密に織られており、裾に刺し模様を施した遊びの要素の濃いおしゃれ着である。

前衿には羽織りのように紐が2本ついている。資料3-1と大きさがほぼ同じであり、同一人のためにつくられた労働用そでなしとあらたまつた時に着るそでなしではないだろうか。しかし刺し子衣であり、形式としては、労働着の類に属するものである。

形状はかけ衿型、二幅仕立てで馬のりもあり、裾もついている。へりとり布は袖つけ部分とまちの上部、掛け衿に少し重なり衿下部分と馬のりにあり裾にはない。

身頃はこのそでなし用に幅をきめて織ったものと思われる。両端とも耳で、裾は1.5cmほど裏側に折り返してくけてある。襦だけは刺し子布で、資料3-1の当て布と同じ雰囲気の刺し模様である。身頃の手触りは堅く、肩布もびんとのりがついているが、紐の先の傷みの様子からみるとかなり着用されているかもしれない。

素材は前述のごとく紺糸で裂き織り状に織った布である。左撚りの太い紺糸を、はっきり見えないがおそらく2本どりで1本の緯糸にして2回、次に中太の右撚りの白糸を2本どりで1本の緯糸として1回、を繰り返して織っている。紺地に白い緯糸が筋のように浮いて見える。経糸はおそらく、緯の紺糸と同じ太い左撚りの紺糸1本であろう。糸密度は、経〔16本/cm〕、緯〔8本/cm（紺5本、白3本）〕位である。

紺糸による地色は〔青味黒10B2/2 (bluish black)〕で、堅く織られており、いざり機で織ったものかと思われる。肩当ての布と衿布は、暗い灰茶地〔5 Y R 3 / 2 (dark brownish gray)〕に薄黄〔2.5 Y 8 / 6 (pale yellow)〕の縞が、図のように中心の黄色の両端に、地色と撚り合わせた経糸を使い緋状の縞をつくっている。この黄色は茱安、黄色は楊梅でもあろうか、植物染料による色のようにみえる。襦の布はほぼ地色の藍と同じである。

刺し糸も地色の色と同じような太い左撚りの紺糸2本どりで、付図のような模様か、手慣れた技術で、しかし雅味のある模様に仕上げられている。資料3-1の身頃の雑な刺し方と本資料とでは仕事の丁寧さに大きな開きがあるが、左襦は2種の模様の間に山道模様が一筋、白い右撚りの糸1本で刺しゅうのように刺してある。右襦はしつけ状に一筋直線が通っているだけである。衿も左右の長さが違うなど、やはり仕立てた人の大らかさがうかがえる。布の厚さは身頃1.55mm、襦1.56mmで、へりとり2.36mm、衿は6.37mmと厚い。重さは約600gであった。

縫い糸は左撚りの紺糸2本どりでである。縫い方は、素材が地厚なため背、脇ともようやく1cmを合わせ縫い〔11針目/10cm〕のち伏せ縫い〔5~6針目/10cm〕をしている。

布端には白糸で丁度かがってあるように見えるが、これは素材の白の織糸が藍糸2本をまたぐために出た耳糸である。へりとり布は、紺糸1本で折り伏せ縫い〔5針目/10cm〕をして丁寧にくけてある。裾は前述のように身頃に裏に折り返してくけてある。紐は襦と同じ厚手の紺布で、1.2cm幅、21cmの長さに袋縫いし

てあるが、先の方はほつれたのか裁ち切りのままになっている。

裁ち方は付図の通りに推定される。身頃は22cm幅で325cm位の長さに織られている。襦やへりとり布は端布が用いられたものであろう。衿布にははぎがなく、肩当て布とよく組合わせて図のように採られている。表布の総用布は約325cmであった。

ま と め

1. 資料の情報

主として家庭内で用いられたと思われる家着型そでなしは、綿入れと刺し子の5点が対称となったが、その呼称はドンチン、袖なし、チャンチャンコ、チョッキなどよく知られている名称が多い。

採集時期は、綿入れは昭和30年代からと新しいが、採集期の不明の刺し子等はかなり古い時代に着用されたものと思われる。採集地は刺し子はここでは山形県にかぎられた。綿入れのそでなしは、佐渡や岐阜県にかぎらず全国的に普及していたことは明らかである。

用途は主として防寒用であり、また労働時にも用いられ、さらにやや改まった時に着用されたらしいものもあった。

2. 資料の分析

a. 形状

家着型そでなしの構成要素は衿のついた身頃のほかに襦から成っている。身頃は一幅仕立てのものや二幅仕立てのものがあり、襦も共布を縫いつけたものや別布をつけたもの、身頃からくり出したものなどがある。衿は一幅仕立てのそでなしには通し衿がつき、二幅仕立てはかけ衿であった。

寸法は類似しており、身丈と身幅をグラフ上にプロットしてもほぼ同位置となる。刺し子のそでなしには襦の中央に馬乗りがあり、それが本来は仕事用であることも示している。

b. 材料

素材は表布はいずれも平織りの木綿布である。綿入れは彩色のある染柄、刺し子は紺無地に紺糸による精巧な樹刺しや模様刺しの刺子であり、後者には更に縞の肩当てが同布の衿とともに配され意匠的效果をあげている。

布の糸密度は綿入れ、刺し子、糸織りの順に粗くなる。布の厚さや重さは仕立て方の条件が異なるため比較し難いが、綿入れも着用頻度が多くなれば必ずしも厚くはないこと、重さは綿入れより刺子の方がはるかに重いことがわかった。糸織

りは固く織り締めてあるため重い。

刺し糸や縫い糸は勿論、木綿糸であるが、色は刺し糸も同系色の紺糸を2本どりで用いている。市販品ではない左擦りの糸も使用されていることが縫製時期の古さを示して注目される。

c. 縫い方、裁ち方

縫い方は縮入れは見るができなかったが他はいずれも合せ伏せ縫いで、厚手の糸織り布についても同様であった。縫い代は1~1.5cmである。

裁ち方は一幅仕立てと二幅仕立てで異なるとはいえ、いずれにしても単純であるが、襷のとり方にそれぞれの工夫のあとがみられた。用布は一幅仕立ての場合は衿布をとることもあって、結局、表布に関してはいずれも3m前後となる。他の衣類などと裁ち合せてとったものであろう。糸織り布ははじめからそでなしの幅を考慮して意識的に織られたものであろう。

謝 辞

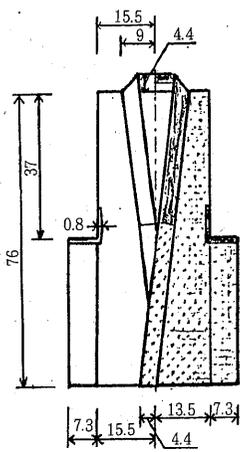
この報告は国立民族学博物館の共同研究「非破壊分析をともなう日本在来の労働衣服の比較研究」の成果の一部である。

御指導頂きました共同研究の代表者の中村俊亀智教

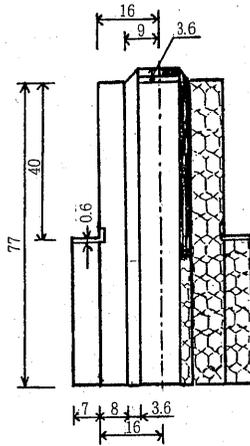
授(国立民族学博物館)をはじめとする各共同研究員の方々、ならびに資料の利用に御基力下さいました国立民族学博物館情報管理施設の方々に、心から御礼を申し上げます。

文 献

- 1) 山崎光子：国立民族学博物館収蔵の労働衣服—とくに刺子の形態・染織の分析—。国立民族学博物館研究報告5(3), 778~800, 1980.
- 2) 山崎光子：国立民族学博物館のドンザー形態；材質、染織の分析—。国立民族学博物館研究報告6(2), 319~354, 1981.
- 3) 山崎光子：防寒着型刺子資料の分析、作業着型刺子資料の分析、襦袢着型刺子資料の分析—国立民族学博物館収蔵標本による(1), (2), (3)。県立新潟女子短期大学研究紀要No.21, 75~131, 1984.
- 4) 山崎光子：風呂敷状・帯状かぶりもの資料の分析、頭巾状かぶりもの資料の分染、舟帽子・眼当・手拭資料の分析—国立民族学博物館収蔵標本による(4), (5), (6)。県立新潟女子短期大学研究紀要No.22, 37~68, 1985.



1-1-a



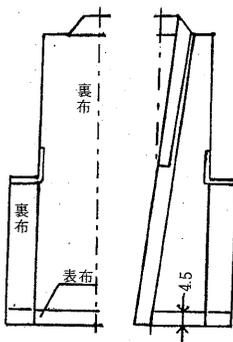
1-2-a

資料1-1 (品名) ドンチン
(標本番号) 27207

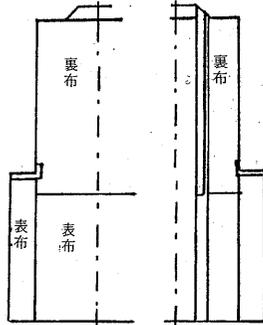
- 1-1-a 形状図
- 1-1-c-1 縫い方
(袷せ仕立て)
- 1-1-c-2 裁ち方推定図
・全体図

資料1-2 (品名) 袖なし
(標本番号) 34303

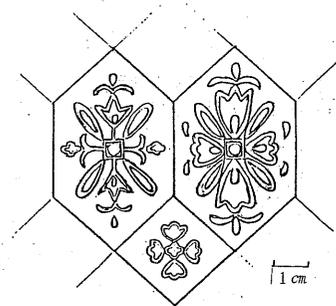
- 1-2-a 形状図
- 1-2-b-1 染め柄
- 1-2-c-1 縫い方
(袷せ仕立て)
- 1-2-c-2 裁ち方推定図
・全体図



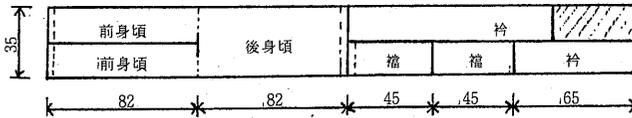
1-1-c-1



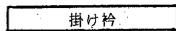
1-2-c-1



1-2-b-1



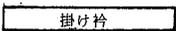
表布 総用布 約 320 cm



1-1-c-2

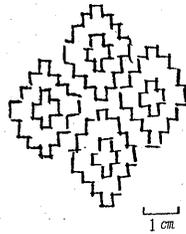
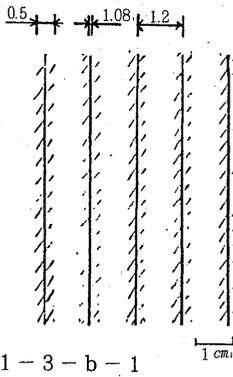
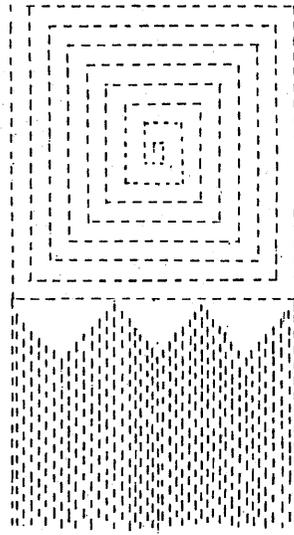
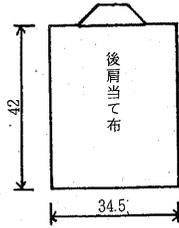
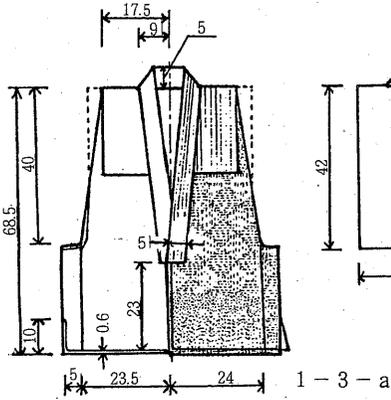


表布 総用布 約 400 cm



1-2-c-2

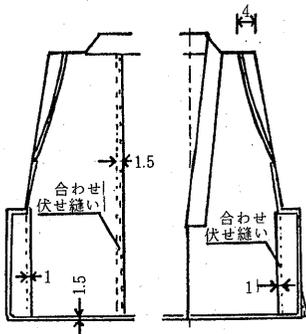
家着型そでなし資料の分析



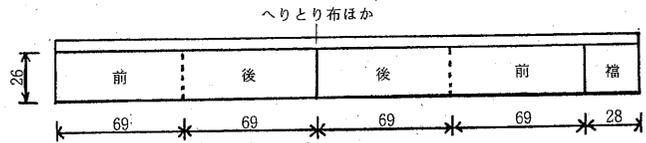
1-3-b-3

1-3-b-2

1-3-b-1



1-3-c-1



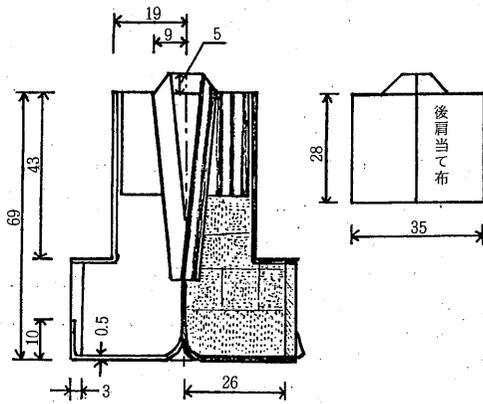
表布 総用布 約310 cm



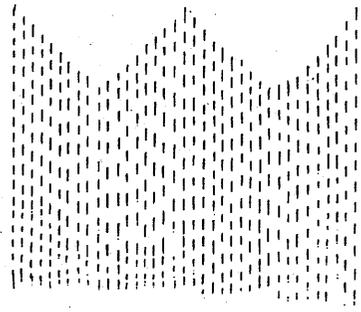
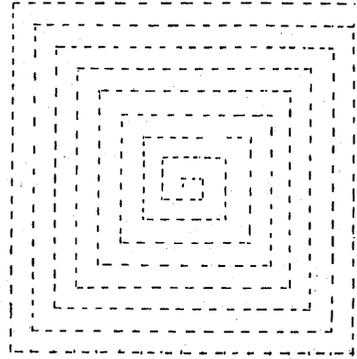
1-3-c-2

資料1-3 (品名) チャンチャンコ
〔標本番号〕 8087

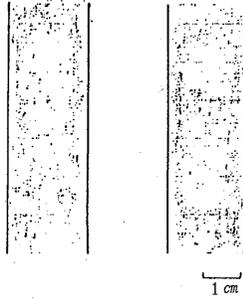
- 1-3-a 形状図
- 1-3-b-1 肩当て布・衿の縞柄
- 1-3-b-2 肩部分の刺し模様
- 1-3-b-3 身頃刺し模様
- 1-3-c-1 縫い方
- 1-3-c-2 裁ち方推定図・全体図



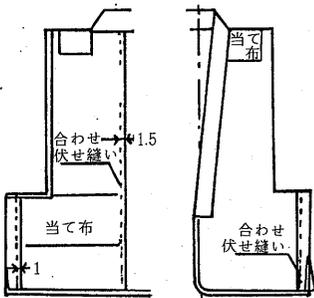
1-4-a



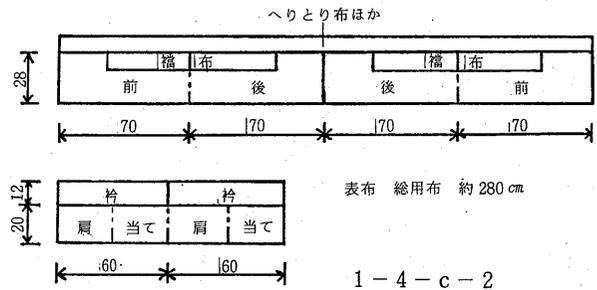
1-4-b-2 1 cm



1-4-b-1



1-4-c-1

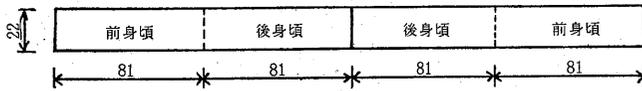
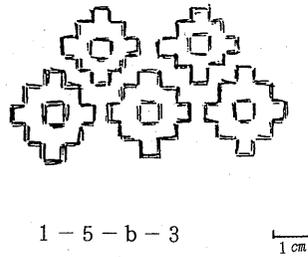
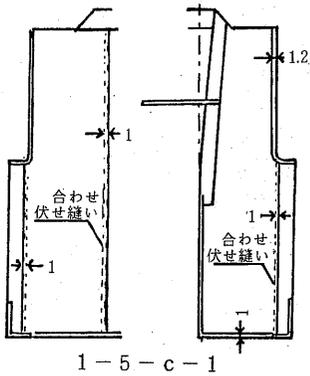
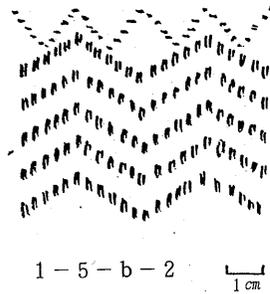
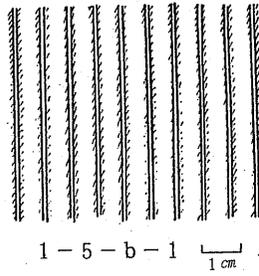
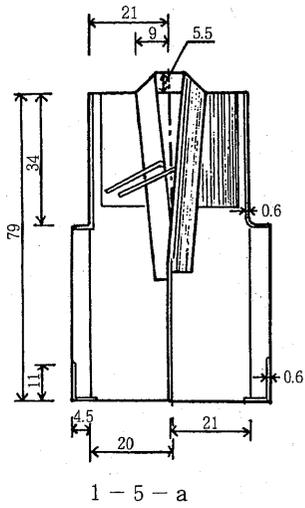


1-4-c-2

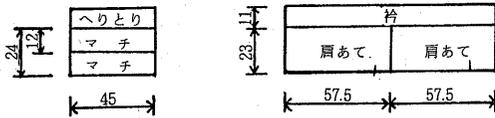
資料1-4 (品名) チャンチャンコ
(標本番号) 8085

- 1-4-a 形状図
- 1-4-b-1 肩当て布・衿の縞柄
- 1-4-b-2 刺し方
- 1-4-c-1 縫い方
- 1-4-c-2 裁ち方推定図・全体図

家着型そでなし資料の分析



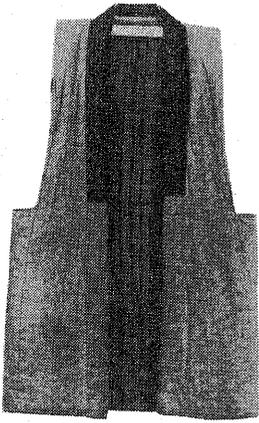
表布 総用布 約 325 cm



1-5-c-2

資料 1-5 (品名) 刺子チョッキ
(標本番号) 32037

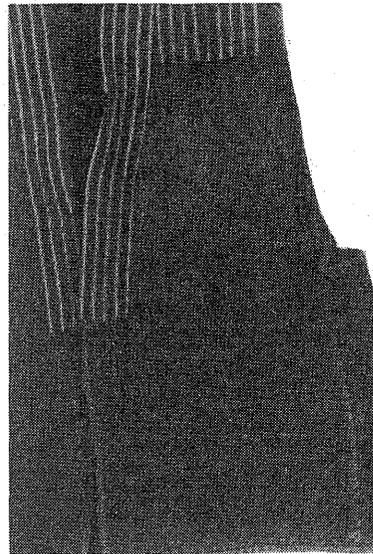
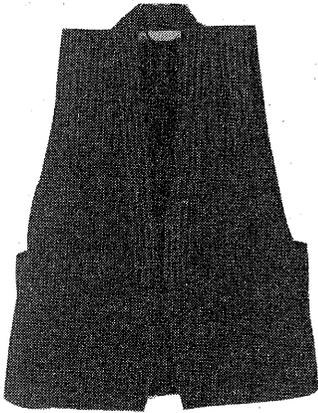
- 1-5-a 形状図
- 1-5-b-1 肩当て布・衿の縞柄
- 1-5-b-2 襦の刺し模様下部と中間部
- 1-5-b-3 襦の刺し模様上部
- 1-5-c-1 縫い方
- 1-5-c-2 裁ち方推定図・全体図



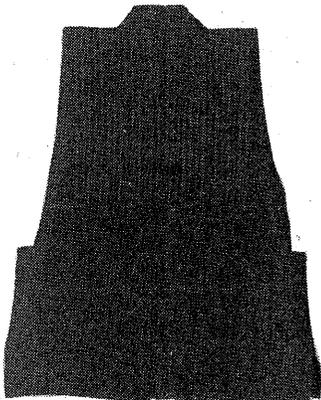
資料1-1 ドンチン〔27207〕

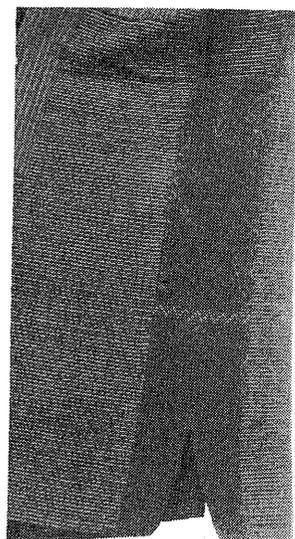
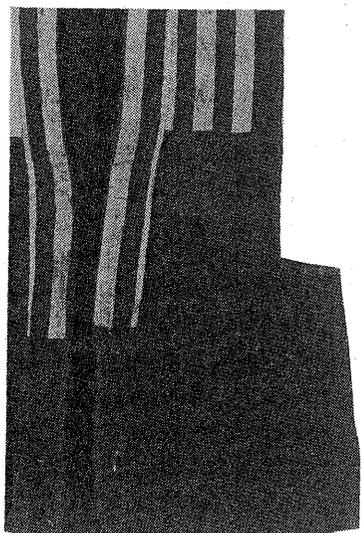
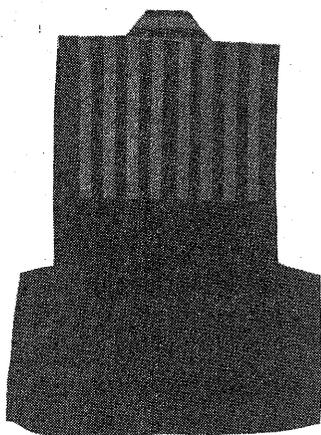
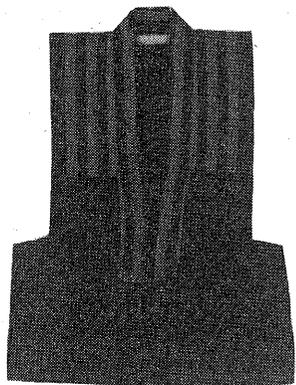


資料1-2 袖なし〔34303〕



資料1-3 チャンチャンコ〔8087〕





資料 1-4 チャンチャンコ [8085]

資料 1-5 刺子チョッキ [32038]